

地域における高齢者の福祉環境の考察

浅利 英 伸

はじめに

第1章 家庭における高齢者に望ましい福祉環境

第1節 高齢者の家族

第2節 家庭における高齢者の介護

第3節 家庭における高齢者の自立

第2章 地域における高齢者に望ましい福祉環境

第1節 福祉のまちづくりの理念

第2節 福祉のまちづくりを推進する法制度

第3節 福祉のまちづくりの課題

第3章 青森県の地域福祉における課題と実践

おわりに

はじめに

近年、わが国では、高齢者の虐待や自殺、孤独死、犯罪、交通事故といった人間の生命や人権にかかわる重大な事件・事故など的高齢者問題が増加している。高齢者問題が起きるといえることは、高齢者にとって、今日の地域における生活環境は決して良いものではないといえる。日本における高齢者問題を引き起こすこととなった要因は、高齢者人口の急激な増加や、戦後60年の社会変動（家族形態の変化・女性の就労の増加・都市化・産業構造の変化など）によって、高齢者を取り巻く環境が変化したことにある。高齢者人口が増加するにつれて高齢者問題が増加するのであれば、今後、地域における高齢者の福祉環境について、何か対策を考えていかなければ、高齢者の生命や人権は守られないのではないかと考えられる。高齢者が、住み慣れた家庭や地域で、生きがいが持て、可能の限り自己決定に基づいた主体的な生活を送るためには、福祉環境の整った、高齢者にとって住みやすい地域社会を構築しなければならないのである。そこで、この修士論文では、高齢者にとっての住みやすい地域社会とはどのようなものなのかを考えていきたい。

第1章 家庭における高齢者に望ましい福祉環境

今日わが国の家庭における福祉環境は、高齢者にとって、決して望ましいものではない。それは、家庭において、高齢者の虐待や自殺、孤独死などの事件・事故といった高齢者問題が発生しているからである。家庭において問題となっていることは、家族関係の希薄化、老親に対する扶養意識の減退、少子高齢化・女性の就業の増加による高齢者の世話をする人の減少、高齢者の住宅環境・生活環境などである。家庭における高齢者の世話は、従来は家族や親族によって行われてきたが、現在、核家族化や女性の社会進出によって、難しいものとなってきている。そこで、私は、高齢者が、住み慣れた

家庭で、生きがいが持て、 possible の限り自己決定に基づいた主体的な生活を送るために、高齢者自身の自立が必要になってくると考える。高齢者の自立のためには、住環境の整備、ソーシャルサポート・ネットワークの構築、老親の扶養についてなどの家族関係の再確認・再構築をしなければならないのであると考える。また、高齢者は、加齢に伴う心身機能の低下や疾病などにより、日常生活において介護が必要となる場合が多い。そこで、家庭において、高齢者自身の自己決定・自己選択が可能で、高齢者の家族の介護負担が軽減でき、高齢者本人と家族の双方にとって生活の質が確保され、家族全体がうまく機能していくような住宅福祉サービスについて考えていかなければならないのである。

第2章 地域における高齢者に望ましい福祉環境

高齢者には、心身機能の低下や障害の保有、家族・近隣住民との関係の希薄化などによって、家庭に閉じこもりがちとなる人が多く存在している。この高齢者の閉じこもりが、高齢者の自殺や孤独死、虐待などの高齢者問題を引き起こしているのである。そこで、高齢者問題を防ぐために、高齢者の心身機能の低下や障害を持ったとしても安心して地域社会に出ていけるようにするために、福祉のまちづくりが地域社会にとって必要である。わが国の地域環境は、段差や階段が多い・バリアフリー化が進んでいない・高齢者の移動手段が不十分である・人々の高齢者に対する認識が薄いなど、決して高齢者にとって住みやすく、望ましいものではないといえる。そこで、私は、高齢者が安心して暮らせる福祉のまちをつくるために、①公共交通機関のバリアフリー化、②歩行空間の整備、③道路交通環境の整備、④建築物・公共施設等の改善が、今後、必要であると考え。「福祉のまちづくり」は、高齢者のみにとどまらず、全ての住民にとって、生活が守られ、安心して生活できるような住みよいまちになることが求められる。そこで、「福祉のまちづくり」においては、住民自身が地域の主人公として自らの要求を出し合い、主体的にまちづくりに関わることにより、住民の人権尊重に立脚した平和で民主的なまちづくり・社会づくりが行われる必要がある。

第3章 青森県の地域福祉における課題と実践

私の住む青森県においては、少子高齢化や、核家族化などの家族形態の変化、地域社会の相互扶助機能の低下などにより、地域社会や家族を取り巻く環境が大きく変化してきている。しかし、一方で、地方分権の進展に伴い、住民の社会参加や自己実現への意識が高まり、ボランティアやNPO活動などの広がりも見られ、住民が相互に助け合い、支え合うといった新たな地域社会の形成を図る動きも生まれてきているのである。青森県では、地域を取り巻く様々な環境の変化や分権型社会の進展等に対応し、多様化する福祉ニーズに的確に応え、全ての地域住民が年齢や障害の有無にかかわらず、健やかで安心して自立した生活を送ることのできる福祉社会を構築するために、平成19(2007)年に青森県地域福祉支援計画を策定したのである。青森県地域福祉支援計画の基本目標は、「一人ひとりのいのちが輝き、人と人がしっかりとした絆で支え合う地域社会の実現」である。そして、この地域福祉支援計画をもとに、青森県は、サービスを利用しやすいあおり福祉の体制づくり・地域福祉を担うあおり福祉の人財づくり・共に支え合うあおり福祉の地域づくりを行い、青森県で暮らす全ての住民が健やかで安心して自立した生活を送ることのできる福祉社会の構築を目指している。

おわりに

私は、修士論文のテーマである「地域における高齢者の福祉環境の考察」について、家庭（在宅）における高齢者の福祉環境と地域における高齢者の福祉環境の二つの視点から考えたのである。現在のわが国における高齢者の生活環境・福祉環境は、高齢者にとって、決して望ましいものではない。その原因は、第二次世界大戦後の高度経済成長に伴い、少子・高齢化が急激に進行したのだが、国や地方における少子高齢化対策が遅れ、福祉の施策・制度がまだ不十分だからである。家庭においては、戦後、家族形態が大家族の形態をとる直系家族制から、小家族の形態をとる核家族のような夫婦家族制へと変化し、それに伴い、老親に対する扶養意識の減退や、少子化や女性の就業の増加による家庭における介護力の低下を招き、家族だけでは親の世話をしきれない状態となっている。そこで、高齢者が、住み慣れた家庭や地域で、家族や近隣住民と共に、生きていく張り合いや喜びといった生きがいを持ち、可能な限り自己決定に基づいて主体的な生活を送るためには、高齢者自身の自立が重要となる。

私は、高齢者にとって望ましい福祉環境とは、高齢者自身が自立した生活を送ることのできる環境であると考え。高齢者自身の自立のためには、自立の障害となっているものを除去することが必要であり、家庭における住環境の整備や、地域におけるバリアフリーやユニバーサルデザインに基づいた福祉のまちづくりを行うことが必要となる。また、高齢者問題は、家族とのかかわりによって引き起こされているため、高齢者に対するケアや援助とともに、家族に対するケアや援助についても、これから改めて考えていかなければならないと考える。

参考文献

- 内閣府 (2007) 『高齢社会白書 平成 19 年度版』 ぎょうせい
 社会福祉の動向委員会 (2007) 『社会福祉の動向 2007』 中央法規
 広井良典 (2006) 『持続可能な福祉社会』 ちくま書房
 一番ヶ瀬康子・高島進・高田真治・京極高宣 (1999) 『戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望』 ドメス出版
 古川孝順 (2004) 『社会福祉学の方法』 有斐閣
 堂岡哲雄編 (2005) 『家族論・家族関係論』 医学書院
 石川実 (1997) 『現代家族の社会学』 有斐閣
 富永健一 (2001) 『社会変動の中の福祉国家』 中央公論新社
 富永健一 (1995) 『社会学講義』 中央公論新社
 袖井孝子 (2003) 『変わる家族 変わらない家族』 ミネルヴァ書房
 袖井孝子 (2004) 『少子化社会の家族と福祉』 ミネルヴァ書房
 直井道子 (2001) 『幸福に生きるために』 勁草書房
 直井道子 (1993) 『高齢者と家族』 サイエンス者
 安達正嗣 (1999) 『高齢者家族の社会学』 世界思想社
 藤崎宏子 (1998) 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』 培風館
 古谷野亘・安藤孝敏 (2003) 『新社会老年学』 ワールドプランニング
 内閣府監修 (2002) 『高齢者の生活と意識』 ぎょうせい
 広井良典 (1997) 『ケアを問いなおす』 ちくま新書
 春日キヌヨ (2001) 『介護問題の社会学』 岩波書店

- 小澤勲 (2003) 『痴呆をいきるということ』 岩波新書
- 落合恵美子 (1994) 『21世紀家族へ』 有斐閣
- 上野千鶴子 (1994) 『近代家族の成功と終焉』 岩波書店
- 山田昌弘 (1994) 『近代家族のゆくえ』 新曜社
- 那須宗一・湯沢雍彦 (1970) 『老親扶養の研究—老人家族の社会学』 垣内出版
- 野村歡 (1989) 『高齢者・障害者の住まいの改造とくふう』 保健同人社
- 野村歡 (1988) 「在宅ケアを支えるための『住宅改造』指導をこう行う」『生活教育』1月号
- 野村歡 (1992) 「障害を持つ人のための住宅整備」『作業療法』11巻4号, 日本作業療法士協会
- 野村歡 (1991) 「高齢者にやさしいすまいづくり入門」『建築知識』4月号, 建築知識社
- 萩原俊一 (2001) 『バリアフリー思想と福祉のまちづくり』 ミネルヴァ書房
- 野村みどり編 (1998) 『バリア・フリーの生活環境論』 医葉葉出版
- 日本建築学会編 (1994) 『高齢者のための建築環境』 彰国社
- 郡築光一 (2007) 『新しい地域福祉推進の理論と実践—東北を中心とした地方から地域福祉を発信する』
中央法規
- 北岡敏信 (2002) 『ユニバーサルデザイン解体新書』 明石書店
- 波田永実 (2002) 『自治体政策とユニバーサルデザイン—住民満足度・最大化をめざして』 学陽書房
- 日比野正己 (1997) 『福祉のまちづくり研究—障害者高齢者らが豊かで楽しく美しい生活環境の創造をめざして』 ドメス出版
- 牧里毎治編著 (2000) 『地域福祉論—住民自治型地域福祉の確立をめざして』 川島書店
- 大橋謙策 (1999) 『地域福祉』 放送大学教育振興会
- 大滝雅寛・岩崎みどり (2002) 『バリアフリー住宅』 ぱる出版
- 右田紀久恵 (2005) 『自治型地域福祉の理論』 ミネルヴァ書房
- 武川正吾 (2005) 『地域福祉計画』 有斐閣
- 阿部志郎 (2004) 『地域福祉のこころ』 コイノニア社
- 川村匡由編著 (2005) 『シリーズ 21世紀の社会福祉① 地域福祉論』 ミネルヴァ書房
- 竹原健二編著 (2006) 『現代地域福祉学』 学文社
- 花村春樹訳・著 (1998) 『「ノーマライゼーションの父」 N. E. バンクーミケルセン, —その生涯と思想』
ミネルヴァ書房